

大森 英孝さん



「新規就農の実績があるということも安心だった」

研修履歴

英孝さん

- 2012.05. 道内の農業法人で研修（1年）
- 2013.07. 長期農業体験（1年9ヶ月）
- 2015.04. 農業技術継承研修（7ヶ月）
- 11. 独立就農（就農時38歳）

さゆりさん

- 2014.04. 禁局勤務をしながら休日を利用して農業体験（1年7ヶ月）
- 2015.11. 独立就農（就農時29歳）

経営規模

農地 3.7ha
 施設 ビニールハウス8棟（計750坪）
 作物 トマト・春レタス・水稲 他
 農業従事者 本人、妻（さゆりさん）

住宅

中古住宅購入



むかわ町では初めての事例となる第三者経営継承の新規就農者育成制度で経営移譲を受け、独立就農した大森さんご夫妻。
 英孝さんは医学系大学研究員をしており、幼少時代は科学者か農家になることが夢だったという。

いづれ早期退職し、退職金を就農資金にして農業を始めようと考えており、短期の農業体験を繰り返したところ考えは変わった。

英孝さん「その時の体験で、体力と経験の大切さを感じました。農業を若いうちからやっていたいかな」と良い農業者にはなれないという気持ちになりました。

■むかわ町で独立就農を目指すという決意した決め手は何だったのでしょうか。

英孝さん「生産者の声で結成されたという受入協議会の存在を聞いて、地元の農家さんが新規就農者を受け入れてくれる体制がしっかりしているということが、安心でした。そしてJA・農業改良普及センター・町が一体となってサポートして、新規就農の実績があるということも決め手でした。」

平成25年7月にむかわ町へ移住し、町内の株小坂農園で約2年間の長期農業体験を行った。

■長期体験中、就農への話が進む中、第三者経営

継承での独立就農も出来ると聞いたときに新農地での新規就農との迷いはなかったのでしょうか。
 英孝さん「迷いはありましたが、両方のメリット・デメリットを比較し総合的に判断して決めました。」

平成27年11月、代々農業を営んでいた中村達雄さんから経営移譲を受け、独立。

独立までの7ヶ月間、農業歴50年以上の中村さんから技術継承研修を受け、絆も深まっていった。

英孝さん「中村さんは僕の出来る事と出来ない事を見極めて、丁寧に指導してくれました。技術面だけでなく、農業の楽しさや農業でご飯を食べるという覚悟も教えてくれました。」

農業は自営業のため、自分に甘えようと思えばいくらでも楽が出来る。そんな中で体力的にも金銭的にも厳しい仕事を毎日、毎年続けていくという覚悟を中村さんは身を持って英孝さんに伝えてくれたという。

現在、全国的に農家の半数は後継者不足であり、担い手を育成する効果的な対策として今注目されている第三者継承事業。

■現実には経営移譲希望者と、経営継承希望者との合意（マッチング）が一番難しいとされていますが、英孝さんは中村さんとのマッチングがうまくできた理由は何だと思えますか。

英孝さん「これは運命でしょうか言えないんだよね（笑）」

そう感じている英孝さんから興味深いお2人のご縁の話を聞いた。

江戸時代、中村さん、英孝さんのご先祖は共に南部藩（岩手県）に仕える侍であったそう。そういった縁からか、不思議と2人の性格や考え方も似ており、技術継承はともスムーズに行われたとのこと。

■経営継承希望者の心得というものを教えてください。

英孝さん「親方のやり方をすべて真似してみる。親方のやり方にはすべて意味があるので。」

■大森さんと同時期に独立就農された方々は継承型ではなく、新農地での独立就農なのですが、設備設置での苦労があるようですね。

英孝さん「何事にもメリット・デメリットはある

と思いますが、継承型は全くの新規就農に比べると、設備は充実しているため、1年目のハードルは低いかもしれません。その分、機械や資材は現状渡しの保証がない状態で譲り受けているので、どうしても寿命は短くなってしまいます。」

実際に就農をして、苦労も多いが作物の成長を見ると楽しくやりがいを感じるという英孝さんと妻のさゆりさん。

滋賀県ご出身のさゆりさんは、独立就農前は隣の薬局で働きながら、休日はむかわ町内の農家さんで農業体験をしていた。

■仕事を辞めて農家のお嫁さんになることに迷いはありませんでしたか。

さゆりさん「主人の夢を応援したいと思っていたので、迷いはなく覚悟は決めていました。」

■実家が兼業農家で、子ども頃、田植えの手伝い等をしてきたことも後押ししたそう。

今年なんと田植え機を運転しての田植えにもチャレンジしたそう。

さゆりさん「むかわ町に農業女子が増える事を願っています。」



■新規就農を考えている方へのアドバイスをお願いします。

英孝さん「もし漠然と農業をしたいと考えている方がいたら、まず具体的に何の作物をつくりたいのかはっきりした目標を持つことが大事です。

例えば牛なのか水田なのか畑なのか施設なのか。施設ならば、ニラなのかホウレンソウなのか。トマトなのかで、就農地や営農スタイルが決まります。具体的な目標を持つことで、初めて周囲のアドバイスが活きてきます。」

インタビューに伺った2、3日前、現在札幌に住む中村さんが、もみまきのお手伝いに来てくれたそう、「師弟関係は今も続いています」と、英孝さんが笑顔で教えてくれた。